

「Slaying the Dragon」一邦題：米国アディクション列伝一（ジャパンマック発行）の中で、ウィリアム・L・ホワイトは、「教育による専門家」と「経験による専門家」＝（回復者カウンセラー）を祭司とシャーマンに喩えている。

1997年にわたしは沖縄のユタ達と共にアリゾナにある北米最古のネイティブ・アメリカンであるホピ族の居留地に行ったことがあるが、旅の途中でユタのおばあちゃんに「ダルクのスタッフはユタに似ている」と言われた。14年前には、よく意味がわからなかったのだが、今はとても理解できる。

沖縄には琉球王朝の時代から、ノロとよばれる公的に任命された祭司がいる一方で、市井に生活をしながら、地域の人たちのよろずの相談ごとを聞いたり、占いを行ったりする民間のシャーマンであるユタがいる。またユタは巫病（ふびょう）と呼ばれる症状「具体的には発熱、幻聴や神様の出てくる夢、重度になると昏睡や失踪、精神異常、異常行動などが症状として現れる」ーウィキペディアーを思春期より発症し、先輩のユタから巫病の克服を導かれながらシャーマンとして完成されていくという。

わたしのようなダルクの回復者カウンセラーを、ユタのアナロジーとしてとらえる所以について説明しよう。「教育による専門家」が公的に認められ、多くが資格を得たうえで仕事をしているのに対し、「経験による専門家」とは、先輩の回復者に導かれながら、多くの苦しみにととも背負っている自らの薬物依存という病気を克服し、そのうえで回復し始めた、あるいは回復途上にある薬物依存者のサポートを行う者ということができる。

「Slaying the Dragon」に戻る。ホワイトさんによれば、アメリカでは100年以上にわたって、アディクション分野で、祭司とシャーマンとの関係を緊張が支配してきたという。そして、ときにはアディクションの治療分野でシャーマンは外に追い出されるか（昔からそういう経験はわたしも多少しているが）祭司に転身するかどちらかだという。引用を続けよう「もしシャーマンがそれによって祭司と区別されている彼らの表現を否定されるのなら、この分野で専門家役割を取って働いている回復者たちの将来は意味のないものになる」～

Slaying the Dragon～

といっても、経験だけでダルクのスタッフをやり続けることの危険性は明らかなのだが。

「この分野の最良の状態は、祭司とシャーマンが独特の相乗効果によって活気づくことであるが、私たちは大多数のシャーマンを失い、沈黙させ、変形させてしまっている」～Slaying the Dragon～今の日本はどうか？

「問題はこの 2 つのグループのどちらが効果的かということではない。治療結果は一貫してカウンセラーのタイプ（専門的心理カウンセラーかピア・カウンセラーかということでしょうね）との関連性を示していない」～Slaying the Dragon～うーん、納得！これが真実だろうな～

締めくくりの文章も極めて重要なのでそのまま書き写しておく。

「クライアントは様々な回復段階で様々な経験や視点を必要とし、このような多様な経験の提供には専門的、文化的、個人的背景が大きく異なった多職種のチームが最適である。専門化への努力（学位化と資格化）は意図的ではないにしても、このような相違を同質化し、アルコール症者や薬物依存症者に及ぼす治療チームの力を薄めてしまうだろう。資格化によって、記号化と他者への伝達が可能な知識への集約が行われると、回復者カウンセラーは暗黙のうちに、霊的ではなく身体的・心理的な側面を回復過程において強調するようになる。回復者と回復途上者は治療環境に情熱とエネルギーをもたらした。彼らは直接のサービスに焦点を当て、彼らの回復と彼らの参加する回復者と回復途上者の共同体から得た、変化の可能性に対する深い信頼を与えた。彼らの人数が減少に向かう時、この分野の希望も消え去っていくだろう」～Slaying the Dragon～

自らへの戒めの言葉としなければならない。